



学校
だより

月にみがきて

令和7年4月25日
千曲市立更級小学校
学校だより No.2
<文責>
松澤 幸嗣

4月の学校生活の様子から

4月4日（金）の入学式・1学期始業式から、3週間あまりが過ぎました。4月の学校生活の様子を紹介します。



6日（日）には、更級安全確認隊がPTA主催で行われました。親子で一緒に通学路を歩き、危険箇所や道路状況などを確認しながら登校する取り組みは、本校ならではの活動です。学校に集まった後は、一緒に毎朝歩いてくださっている地域の安全パトロール隊の皆様から児童会長からお礼の言葉を述べ、全校で感謝の挨拶をしました。子どもたちの安全な登校のため、今年度もお世話になります。よろしくお願いいたします。



9日（水）には、3分間マラソンはじめの会が行われました。子どもたちの体力向上に向けた取り組みの1つとして、本校では毎週火・水・木の朝、季節に応じて「3分間マラソンまたはなわとび」に取り組んでいます。4月は、満開の桜の花に囲まれた校庭を気持ちよく走ることができました。マラソンやなわとびの活動を通して、走ったり体を動かしたりする楽しさを、たくさん味わってほしいと思います。



10日（木）には、1回目の避難訓練が行われました。今回は、万が一火事が起きた場合を想定して、教室から逃げる時の安全な避難ルートを確認しながらの訓練でした。子どもたちは、訓練だからといってふざける様子もなく、誰もが真剣な表情で取り組み、職員も真剣な表情で児童の人数把握や報告をしていました。

訓練後には、校長から「昔の人は、世の中で怖いものを『地震・雷・火事・親父』だと言い伝えてきました。いつ起こるかわからない時に備える訓練を今日のように真剣に取り組むことで、自分の命を自分で守ることができるようになります。」という話をしてまとめをしました。

24日（木）には、1年生を迎える会が行われました。2年生が代表して学校生活の様子を紹介し、全校のみんなで呼びかけや歌をプレゼントすると、14人の1年生がうれしそうに微笑んでいた表情がとても印象的でした。1年生からも、お返しに呼びかけと歌をプレゼントしてくれたので、心温まる素敵な時間になりました。



【雷には十分注意してください！】

奈良県で起きた痛ましい落雷事故を受け、学校でも予防のため子どもたちに「次のような場合はすぐ建物の中に避難すること」を指導しました。各家庭でもご確認いただき、子どもたちが落雷事故に遭わないよう、十分気をつけさせてください。

◆厚く黒い雲が頭上に上がった ◆風が急に冷たくなった ◆かすかでも雷鳴が聞こえた

【4月PTA総会の校長講話より】



(前略) さて、今から十数年前に出版されたこの本を、みなさんは覚えていますか？ 学年ビリのギャルがある一人の先生と出会い、1年で偏差値を40上げて慶応大学に現役合格したという実話です。「ビリギャル」という書名で出版されたこの本はベストセラーとなり、有村架純さん主演で映画化もされたので、きっとご存じの方も多と思います。最近、ビリギャルのモデルとなった小林さやかさんのお話を偶然読む機会がありました。内容にすごく共感したので、先週は先生方にも紹介しましたが、今日はその一部を保護者の皆様にも紹介させていただきます。

私がモデルとなり、累計百万部を突破した「学年ビリのギャルが1年で偏差値を40上げて慶応大学に現役合格した話」の出版から早十余年。出版や講演を通して、いまでも変わらずビリギャルとして活動させていただいています。これらはビリギャルの著者である坪田信貴先生との出会いから始まったことを思うと、感謝してもし切れません。

地元・名古屋の中高一貫校に入学した私は、受験勉強の反動から夜遅くまで遊び回るように。素行不良で停学になることもしばしば。ついには、大学への内部推薦は受けられないと告げられました。

そうして迎えた高校二年の夏、母の薦めで面談に行ったのが坪田先生の勤める個人塾でした。周りの大人に煙たがられていた私にとって、坪田先生は私の話に真摯に耳を傾けてくれる、初めての大人でした。二時間話し込んだ末、先生はこう呟かれたのです。「君みたいな子が慶應に行ったら、ドラマチックだよなあ」

慶應がどんな大学かさえよく知りませんでしたが、先生の語りから未知の世界が待っている気がして、ワクワクが止まりませんでした。様々な人と出逢えるかもしれないという好奇心に突き動かされ、慶應を目指そうと決めました。

とはいえ、当時は偏差値二十台で学年ビリ。周りからは「受かるはずない」と罵られる有り様でした。**それでも諦めなかったのは、傍で支えてくれる母がいたから**です。母は常に私の意思を尊重してくれ、塾に通いたいと伝えた時は涙するほど喜んでくれました。**たとえ失敗しても、学びの機会と捉える母に育てられたからこそ、臆することなく挑戦できた**ように思います。

一人の先生と出会い、その先生を信じて努力し続けた「ビリギャルさやかさん」ですが、周りから何を言われても慶応大学合格を諦めなかったのは、「傍で支えてくれた母がいたから」だと語っています。では、さやかさんの母はどんな人だったのでしょうか。ビリギャル作者の坪田先生は、著書の中で母のことをこのように語っています。

ああちゃん(さやかさんの母)は子どもの頃、自分のことをダメ人間だと思って育ちました。ああちゃんの母親は、「この子には良いお嫁さんになってもらって、自分がつかめなかった家庭的な幸福をこの子にはつかんでもらいたい」という一心から、家事全般に関してああちゃんを厳しくしつけるだけでなく、叱り、怒鳴り、叩いて育てたそうです。それが母親からの絶大な愛情表現だとああちゃんはわかっていたので、母親を恨むことなく大好きでいられたのですが、自己肯定感は低かったので自分をダメ人間だと思っていたそうです。

また、ああちゃんは子ども時代に大人の世界のイヤな面もたくさん見て育ったことから、いざ自分が母親になった時には、独特の子育て論を持つようになりました。

- ① ただの学歴にも名声にも意味はない。だから、子どもに大人の理想は押しつけない。本人がワクワクすることだけをさせる。それが子どもの感受性ややる気を育む。
- ② 子どもに絶対腹を立てない。叩かない。子どもなりの理由をよく聞いて、諭してわかってもらう。
- ③ 世界中が敵になっても、我が家だけは絶対に味方だ、と思える家庭を作る。怖い親にはならない。
- ④ いつでも、どんな時でも愛情をかけ続けることで、何にでも感謝できる子に育てる。感謝できたら幸福感も得られ、運も向いてくる。それが人にとって一番の幸せではないか。

今日ここにお集まりの保護者の皆様は、ああちゃんの子育て論についてどう思いますか？ きっとどれか1つは、皆さんが毎日気をつけていることと重なるのではないのでしょうか。

ああちゃんが子育てでずっと大事にしてきたことは、どれもそんなに難しいことではなさそうですが、これを毎日続けていくとすれば、相当な覚悟と自覚が必要になります。一人一人の子どもには、その子なりの人生があり未来があるので、私たち大人は子どもたちの成長を信じて傍で支え続けていくしかないんだということを、ああちゃんの子育てから改めて教えられた思いです。

これからも私たちは、子どもの可能性を信じて愛情をかけ続け、大人の都合や理想を押しつけず、時には隣で、時には後ろで子どもを見守りながら、一緒に歩いていきましょう。本校の職員も主語を「教師」に置き換え、どのように子どもと向き合うかをじっくり考えながら、本校が目指す「自己有用感をもっと高め合い、他者と共に生きる学校」の実現に向けてがんばりたいと思います。

【連絡】

- お子さんの靴紐がほどけたまま登校していないか、家庭でも確認をお願いします。(朝時々見かけます)
- 放課後や休日等にお子さんが自転車を利用する場合は、必ずヘルメットを正しくかぶるよう、各家庭でもご指導ください。また、万が一に備えて自転車保険への加入もお願いいたします。